

## 【多摩丘陵・私の出会った生き物たち 6】

### < ゲンジボタルの夜 >

桑原紀子

6月は梅雨のさなかですが、中旬を過ぎるといよいよホタルの飛び季節です。

蒸し暑い夕方、今日はホタル日和だな、と思う日があります。

暗い谷戸田に飛ぶ幻想的な光を子ども達にも見せたくて、毎年文庫の親子連れでホタル見物に行きます。

今年は昨年より一週間早い6月19日でした。午後7時過ぎ、鶴川からバスに乗って15分、降りると、蛙の合唱が暗い田んぼに響いています。細道をしばらく上って、ホタルブクロの花がほの白く見える土手沿いを下ると、目の前に雑木山に囲まれた田や畑、休耕田が広がっています。

懐かしい多摩丘陵の里山風景がここにはまだ残っています。この谷戸田を流れる小川の清流で、ゲンジボタルが細々と生息し続けているのです。

8時頃になるとすっかり暗くなり、木や草の茂みで光りを放っていたホタル達がフワーと飛び始めます。草の茂みに潜んで、光を点滅させ

ている雌を探して、雄も光信号のように点滅の合図を送りながらフワフワと、ある時はツイーとはかなげに飛びます。

光の点滅の間隔は関東と関西では数秒異なり、方言のように地域差があるそうです。

初めてホタルを見た若いお母さんが「ホタルってこんなに弱々しく飛ぶんですね」と呟きました。

でも、はかなげに見えるホタルの光は、実は生命への熱い願いを内包しているラブレターなのです。

山間の暗さにこわごわだった子どもたちも、「ホ～タル 来い」の歌を唄い、ホタルがちらに飛んで来ると大喜びです。

近くに来たホタルを捕まえてホタルブクロの花の中に入れて見ると、点滅する花のぼんぼりです。

子どもたちは息をつめて、その灯に見入りました。ホタルは今年も忘れられない思い出を、作ってくれたようです。